

第 1 回かづの未来会議での意見について

1 人口について

- そもそも、なぜ人口が少ないといけないのか。
- 子どもが少なくなっていくと寂しさを感じる部分がある。子どもを地元で生める環境をもう一度整え、良い方向に向かえばよいと思う。

2 住みごこちについて

- 子どもが大学生ぐらいの世代（50 代）が、住みごこちが良くないと感じる人が多いのであれば、子どもの卒業後の進路にも影響してくるのではないかな。
- 移住者や観光客から鹿角の自然がすばらしいと聞く。全国で災害が多発しているが、鹿角は少ないことから、住みごこちの良さに繋がっている。良くないと感じる理由の一つには、医療と福祉環境の問題がある。
- 30 代の子育て世代の数字があまり良くない。どれだけ大人が子どもに対して、鹿角を印象良く見せられるかが大切である。

3 中高生アンケートについて

- 地域の伝統文化の継承や活動が活発な地域に住む生徒の数字が良い。地域活動が大切。
- 若者の県外流出については、仕事の関係や給料などの差が大きい。
- 卒業後は市外に出ていくことを考えている層で、地元には仕事がないという声があった。就きたい職業があっても、地元で実現している人が身近にいないため、現実的に自分の将来と結び付けられていないように感じる。
- 都会と同じものを田舎に作ることは解決につながるものではない。足りないものがあれば生み出すことができるということを子どもたちに知ってもらう機会を積極的に提供することが将来の鹿角にとっての種まきになる。

4 若者の地元定着について

- 産婦人科がないので、若い人が定着しない、子どもが生まれない、県外の学校に行っても戻ってこないという悪循環になっていると感じる。
- 仕事の給料面では他と違うが、鹿角は自分でクリエイティブなものを生み出すことができる可能性を持っている。都会で経験を積み、学んだスキルを生かせる 30 代中盤ぐらいの Uターン者を増やし、その年代が起業して、活発な働く場所が増えていったときに、そこで働く 20 代の居場所ができていくという好循環が必要では。
- 鹿角で自分の子どもに夢や希望を語っている親がどれくらいいるのだろうか。親が夢や希望を語らなければ、当然子どもには伝わらない。子育て世代の 30 代、40 代が子どもに夢を語るためには、きちんと稼げるかどうか重要である。業種、業態、商品によって違いはあるが、共通して言えるのは、鹿角にあるたくさんの素晴らしいものの価値を

高め、安売りせずに利益を得ることが必要であり、そういう環境を地域全体で考えていくことが大切である。

- 農業の跡継ぎ不足が課題となっているが、若者がやる気になれば稼げる産業だと思う。

5 Uターンについて

- 昔は後を継ぐという意識が強い時代で、自分自身もUターンしてきた。今では価値観が異なると思うが、親子の関係は大切に守れるような取組が必要ではないか。
- 子どもの成長過程で都会に憧れを持つのは健全である。一度外に出てから鹿角に戻ってこられるようにできればよい。ふるさとの良い面を比べられる目を持つことは、鹿角にとってもよいことだと思う。
- 自身の経験を通じて、地元を離れることで地元の良さが見えてくると感じた。若者たちを地元から出ないようにするのではなく、一度は外に出て、様々な経験を積んで戻ってきた方が厚みのある人生になるのではないかと思う。そして、地元は若者たちが可能性を感じられるような教育や戻ってこられる環境づくりをしていく必要がある。
- 一度都会に出てから戻りたいと思ってもらうためには、子どものときの経験が大事であり、大人が楽しんでいる姿や活気のあるまちを見て、自分が住んでいる所は良かったと思えるので、大人が楽しんで子供を巻き込む、大人が自分たちのまちの自慢をもっと伝えていく必要がある。
- 一度市外に出て戻ってくる人がほとんどいないのは、鹿角の魅力が分からないというのが大きい。鹿角のよい部分を小さい頃から伝える必要がある。自分たち大人が鹿角の対して「何もない」と言ってしまう人がいることは考えさせられる。

6 高齢者対策について

- 高齢者にとっては良いまちだと感じる。シルバーリハビリ体操などを通じて、元気な高齢者を増やしていくべき。
- 高齢者の数を維持すること、健康で長生きしてもらうことが必要であり、高齢者対策に予算をかけることが必要である。

7 文化や自然などの財産について

- 鹿角の財産をそのまま10年後、20年後、30年後にすべて持っていけるかと考えると、非常に難しいと感じる。残す努力と取捨選択する目を養いながら、現実感のあるまちづくりもしていく必要がある。